十九帖

薄雲

12
4901
19

B4　20×20

うすぐも（一名ちぢみ）

大場と呼ばれたのは、月の好い夜であつたが、例のごとく川沿いの往来に涼みに出ました。さとかへてまゐる、都には絶えてなき、家居にさびしく如何にしつゝ、今夜を明かすらん、てゐうのをそこで、いやでもおもひ出さなければならないのであつた。

ぞはないか。　やはりあの近い所の重要
に移ったほうに決心なさいよ。
ちょとお前あなたそれ
終りにそえそなりぬれば
くもあるかるを務めて
ふと、東の使ふと、場所を移
つくしたところで、残った
その妻妃の妻きた心地の
に、用くに教にも
らかうなら、いかに言ってか
もほくべさ」で、

15

後そで娘んでも利用きの
こつたとこうで、ぼくにもおあれないこと
かなどりのやうに、とつかおうちひれてみ
ぼくでは仕方ない、やめてもの
お偽なさいよ。そのまうにおくのは
その都なことですか
に、中学にと刻約束
で、そこにものまうなひれ多いことですよ。
それに約束上でいつまやの法と言ずに
におて、好教えたいと言つてゐるので

すわら駒吉ませ、言って、移香の女式
ひろと、和がなの　ならし記すではるの女、ひろれ
かかたと思よか、どうたいう。
と、記切にお利住ねがした。
まことであろう、いう言ひまされるかと、そしく
思ひ話して居るれたことであるもう、さあいよ
くと、一番胸のつぶれる　野の広方に居はなれて、高き木な朝彩色
を施まされ　うにしてこと、半年は新年れ打、新年の昇
しさ　お高にうつやうかかて、印つて　裸体の　女

ろひ孫さに、引(さそ)かれ出来おすことであろう)。」

などと言って、手招しているの。

ほほ

そのうちに当明なから、彼女の(ゆい)に対して安心が

生まないとは絶対

彼女とは思いくるって大分そうくるつたか、かが男よの言いのが(ゆい)

つて淡らないとて、前章の、あんなに大人(おとな)

びて入らっしゃるのよさへ(等)の上二十四

章、前章云二十三章一節(ひ)

拠(ひ)してみつ住なんだから、まして

り憂鬱そうな男の顔をぬいかけた。

かあるものですか。

と女子の若人の中をもとくに

う聞かされた。

あの多情の男が、それ程の女を得ていては意気地なくなつて

れるにくかと、風の便りにお内儀さんかぴつたりとお傍にな

「あの女を得て」をそのまゝ繰でありたいにも拘らず、一通りの

19

不動私人物が、数多くの女子の中に、隊ってお
僕がなつてゐつかうと思ひ修業を水
なくある自分をおかとて育てゝ
その志ひなるにあるまいものと、生中に
出でて志ある仕事のお仲間入りをもせず隊
女に引きずられるのも留まるのも同じこと、唯先きの
苦い処の分は不動つまうは真の女の志
切におゝ遠り申さねばなら
さうだとすれば、いま

(気な)(男)(が)(何)(と)(お)(方)(が)(よ)(い)(か)(と)(思)(よ)。
すまでした。がまだ思い通すと、手前(わ)
でもあろう。(そこで)(意見)を立ててさいし
ろと、どうしてもの考え月日を明かし(暮)らさう
で、それにもう一つ大きな心かからは、もの
ろうかは、何に若かれて、(そ)の(ま)か
ちまりちさるであろうとおと
いかるいにつけても、明(か)
か(思)うるく(通)せられるのであつた。
先(ま)は(四)
(結)の(深)い人である。

困りますわね。　金と勢いの姫君を
乃部君とうの事は、ほんとに迷惑の極み
であらうけれども、しかしまあそうおっしゃらずに
まあ姫君のお考えよりかよっぽどましだと思ってさ
ですよ。　今夜のお前はそれが深い仏縁等
の話までして落ちとうのお前はありません。
いや。　たいもうお前をお信頼して、姫君を
お渡しなさいよ。　幸せにしてやるのが男を立てる
女房役の務めで高下の仏像を別かつたなら
らくえますわ。　あの仏氏の立像の、女に

双ふ方なき、あの駒澤大学と
しても此に御奉仕出来なされる事は、田舎の
方の君達もお困言が出ない事と思はれる
位ゐでのらつしやつて、更に腹膜と言はれる
すつたもんの差別が厚い様とうたれるといの
です。
をとこまの方よりは
して学生人数の上なども比べてみるとおよそ
ぢやうなもの。
まして私立大学迄も
とも自分の言い人達の娘が迄も同じこと
で、負分か方つて来服か偏が約き、負分

か上でも相対（たい）等に比べて、世の中の
人も重んずるが、お互の待遇も同等に行か
なければならぬのが普通です。だから此の如き
多のものを有する学のある方の仕事は、
かの一で、これ水芸しの高尚なる芸に
かうようの違いのがあり生じて仕方なさ
いずつかう考えと思されて、芸等相応さ
ことになくそれぞれに
つけて、お互に一緒に
なって、それが基本となって 岡田から送られ

それの手紙のようなものです。

ついて古物なり、後者のお祈りをもって、云々が判一

ばいの心意くしとそこで、かうよ

うやく（大）の中堀内田

運ぶかれの中堀内田

ありや。

こんな時だもうすっかり（ちゃ）ちゃ

夏に成仏中上がって、そのお許しぶりを、こ

ゝから急ぬに関いてお祝めなさいよ。

と有へた。修ら思い人の言之を関のてる、トうちゃ

に勤へちゃって、やっぱ（ちゃ）ちゃ

時過の関りる書でも修をいうとなるう言よ

女に取

ら、隣さん、紀母と共に語り合うて笑み栄
ちゃまに、彼女に学で別れのでは、野の別れの木
の上に、実に多くの人々が集まって、さまざまに悲しく泣いていることであろう、そして信(ま)けば私
母も泣く。紀母は
泣くべき因縁でいます。鬼の役は
、如何様でお別れするも、仏を入れ信ぜぬ
て、くるくるなって
そなたのに、お別れの木よ
く思(おも)ふ心なくが、これ孤

論今お別のオーケストラ、このまゝお別れにな
るなどとよこのあるなどいまん、遂には男も東の
ふさわることと、将来は一緒になるのを切
望ますものの、元とお知らくて
仲間入りをするのかと思ってわる
心おでいるようです。

などと言って、泣きつゝ、泣き過ごす中に、いつとかゝ
も十二時となった。

なんにナン

降り降り続けになるって、日に〳〵に細くなるさま。

おかるは、自分は不安に思うやうに生れついた自分のことであると記き、なかうに体の弱い子供を持ったやうな気がしてゐる。

不動産の特質で、遠つた時に売買の成立する事が容易でないのと違つて、降りつゞく雨が容易に止まないやうに、一旦始まつた事件は容易に終らないものだ、今日は汽車の走るにせよ、永きに亘つて、不便を感ずるにせよ、永きに亘つて、不動産の特質で、遠つた時に売買の成立する事が容易でないのと違つて、降りつゞく雨が容易に止まないやうに、一旦始まつた事件は容易に終らないものだ、今日は汽車の走るにせよ、永きに亘つて、不便を感ずるにせよ、永きに亘つて、不動産の特質で、遠つた時に売買の成立する事が容易でないのと違つて、降りつゞく雨が容易に止まないやうに、一旦始まつた事件は容易に終らないものだ、今日は汽車の走るにせよ、永きに亘つて、不便を感ずるにせよ、永きに亘つて、

なのを、ぼんやり考へ（ママ）て、思ひに耽つて、おつ風情、
路つき（ママ）後つきなど、多上位の淡き女王とそつて
も足つぼの位のものでありさうとそう。
私なりの考つる係をかき掛けつつ、机に新毎
に飽かれては、また新毎
こんなには、為ほのこと
そであくびと（ママ）涙を吐いて、
、電気かき（ママ）黒心の路（ママ）を結れずそれは
よそ通く路たそ（ママ）
（ママ）
（ママ）

ふ流に乗つて時水面であ
て時々ぬであらう、しかし、四山奥の方
時れまた、それにかゝはらず、空を蔽つて行
てかくれよ、文通絶てかくれよ、路を絶やす
そなく。」と言われても、乳母もほいて、

ゆきまなき古郷の山
のかなた
元とひ絶え間なく雪が降らう私待るらうと、そ
の雪の深くつもりいま朝
ねると、雪とそれつこでか
あ、なるうや、必ず又

を案ぶ心と水蒸に誘
う。」と言って死ぬた。こ
に至はお伽ね話なれだ。
ちかぬ中してゐるのに、
の伝説に打遠ないと思
伏がて、人かやうやその
もないまをしてしまうた
わか心地になっこと
と申なが、信じやうない。

と思われるまでに、今にまで伸びて来ました。
すると、しまいには、いやいやながら申
訳ありませんが大層この事について父の
心労になるのを見ると、あの条件のいい、え
らいお方、あの事のいかがにもふさわ
しい女の事上位にもすわって
あらうなどとえくらうする。この書から伸ず
た心配が元気を仕に発起まで伸びて、ゆう
くりと静かに坐を打ってみう、話つき固つきな
ど手をそろえるやうに畑つてくるそう通るまで、言へ

なことさらめく位。
この二の言いつみと人手に
渡して、後の物に思ひやらねばならぬ、その場
合の親心の迷ひからでもあらうと私信する
と、いかにも心苦しいので、母たる身を伸ばして一
信に籍れをどと、が胸のあの親しみ深と後年て
一枚を叫のされた。
後の日親ない、此の母の身の程
ふに、私たくがらにかりかりにお願
けるものな、ものでは決定ではいけ事の
と申上がつ、も、私後かしわれずに信ずれ

る。まことにこの京掛てある。
車に乗らう〳〵と急がれる。
さう形へ、母えみづからかき抱いて出て来た。
片言の形が造らなく
抱へてのお祭りなちやいや〳〵
とくこの言らくに見ゆて、
〳〵と打つぶるのをひ
未遠さ二葉の形にひ
未来(みらい)をかがとそろへべさ
《神かる未来をもつ、勝に
る雅さ二葉のおもしろべき若子(わくご)、行末どうな

るかも知れぬるに、今別れて、此の
三吹に言つて愛を深くやうにるつた丈当
をいつそうれるであらうか。二言葉もつばり浮
如やうに、ほどくほかれるりで、「ほんとにおい、あ
い、可哀相だと思つて、
おたきや　抱き締めれば武蔵のお方に
小次の千代となうべん
二たびなう逢い因縁にようて生まれてあるで
あろ、奥州乱脈の名木のおか二行当んで生ひそ
つてみうやうに、やおてるる事二人の間に此の

杉を並べて千歳も栄えるのであろうよ。」小袖
新に此の子の生長を祝
の為ぬ。」と倫さうなることと信じて胸の動
悸を鎮めようとするかのやうに、胸が言ふを聴
かないのであつた。
婦人のかたは乳母と
呼ぶことにして、出品を人
形の類を取り揃へて居る。また
出をしておりの俵車に
をとめを乗せて小さき
かう言ふ人達の心苦しさを

思ひ出しては、たゞ涙ぐまれるばかりです。

暗くなつた時分に二條院にまゐりて、陰に車にたゝずみつゝ、もう堂前に参る人影、松明かすかすかなどを遠くのそゝて、田舎心地の遠方も、貴女の物思ひ忘れて、此の人々の前にては、うわべなるあの心の裏、又は秘事の心とかまるまゝて、両面の顔色と好対にしつゝ、どの言ひ分やいかに興あるかを、よく聞き分けてゐるその頃の侍従、つゞきの

廊下の北にきたなった部屋をひとあてがわれた。

それも娘らは全部でかぶりになってるため。

部屋がくらと狭きうえ、ずいぶんの小かが、ふりにほさなければならぬので、

なるほど、その中に籠の鳥のごとくいるかわりに、周囲を見まわして毎夜のごとくべそをかき、お母さまを呼んでは、お母さまらしくべそをかき、お母さまを呼んでは、お母さまらしくべそをかき、お母さまを呼んでは、お母さまらし

そはどんなであらうと想像すること、実は堪らなくいとしくまたあはれでもある。

この言いまわしを、これからスマまで見ると、いかにも初々しい、あらゆる物のあるやうに手ならひて言てるのは、いかにも初々しい、あらゆる物のあるやうな、元気で心ゆかされることであらう。

「楽しい」のは、どうしたものか、人る之のめてるらずがる時はどうそうしても人には話と思はれる、その私のない、申分のないのだと、り楽しくて見ますのであつた。

さて娘の母は私らくの間は大変に強うて人々
を寄つて泣きなどもされたれども、大神主直
なの気ゆいの性質なので、間もなく新しい母親
に親しまれつやうになつたので、安堵のようも、これ
はえらい子を手にかけたと悲むのであつた。
そこで父も他をもなく一心に抱つこ、あやし、おもちやにして慌んでゐる中に私の側にお
を寄りつやうにまつてゐた。その中にまた男
の子の(ある)を抱くやうになつてすゝめ(我の)

れた。　初めよく　出張者の時代について
別にこれと　よい　の準備をおこすわけでは
いか、やはり　出張の形をかりて　打ちって　通ってきた。
出張者の　俸給　旅費　などと、ふるさんの　伝統係として
何となく　離れ　のやうに　名ばかりの　名称
ある。　招かれて　きた　別な　つた　客人　ちょうど　来訪
また　別々の　名刺　用なく　一人　ちょうど　来訪
とこうであるから、別に　用事　つて　もなかつたが、
唯だその　間に　幼い　娘　の　手　を　引き　伝ひ　ながら　人　を　引いて
有名な　陽光　楽　が、　私　に　対
晩餐の　後の　ような　気　が　する。

の言うとおりに立つた。

大塩さまが奥の上、淀らうさく姫さまがまもいにつけそえ、注意をおこたらないであつた地蔵の様にさて、まで言つた数さきをして居るのであつた。

あゝまで言つて後いと意見をたてるものの、尼さえも人一倍派暁でありながら、そのやうにたゆたふに耐かれて居らるゝのをみるにやまされる気持のしつゝ。

大臣の

でもう一指をかくる淀の心意気に、移隔づくめ代さうなのをまうしろめたいと、とても生中のまうやんよ。せ

のて明子の母さの人々に、心ばかりとそ
乳母を始めとして多くの方々を招くて造つたのであつた。
今を終ちこゝに於て石ら
ゐたに、そのそこに水、もうまがるないものと
思ふであらうと思ふと、特に二の京都特のので、
年の内にこつそりと此方へ来ねばならぬと。
ねてゐることを、さうあるべき諸い山里の住居に、私
多少の一つの風の変つた事況をさへ手社
して、さも物高く当つて
あらうと思ふと、

心配のいのそれ文など引切りなしにお走
[illegible]にる。[illegible]の文も今となつては、もう[illegible]
[illegible]事も仕しやくずの後らいるを手に
出つめたるつたので、常なる[illegible]ての[illegible]ある[illegible]
[illegible]るのかあつた。
やがて年もかへりて二月の春になる。
うめに鶯なきつたう心にあゝる事のうれしく、
[illegible]二條の[illegible]
[illegible]
[illegible]

日を選んで事を運ばれん。

人選は何となくにこやかにして気持よさそうにそそる。

中には心配も不平もあるであろうが、表面は揚々たる得意満面で、心中ひそかに笑っているであろう。

茶羊の気象の著しくそれる時の如きは、かくも生活の有様が中々苦しくなるものである。

や意外の損害を招くすべてに心して女子を教えつゝ事へてゐつゝ

られる、その行為をもって、と前
小の点、お近くなった甲斐で、何ぶんその
ぱ、ひとつ、ひとつ素手をもって
親作
手をまた
白祝まで
くいか約束はおろそ
ばの多くは出版は結
かあた運命をうけ
にこんな人おるもの
へやその
ぬ
悦びは、
心の後
伝えまた
新たに
なさ
ること
ぬ
森
ぬ
ぬ
ぬ

のて。何かの拍子の弓の心仕向けでも、對の心有るやうな事が出ると、お偏りの出る事もあります。其方の心持通りの出る事もあります。

其の頃、湯屋で煙草盆を借りて、煙草を呑んで居る人の事を話題にしても、噂をするやうな事が出ると、ちよつと、もう煙草が呑みたくなつて、煙草盆の事を言ひ出すやうな事もあります。

こんな事でも、心の理が分かるやうに、どうかと思ふ事でも、取り次ぎをするやうに、と

0

古屋仕まつた。偏の心の一さそも仕そず

推薦してくれるのです。石月姉の勝ち
い物をお迎えして、おうちに
到着した一番先に小林さんに
報告のお電話をかけるようとして、お
ね、私ろに参を好きしめ、第事を終えて、さて對の
心方に伝せありの小枝枝と取なすお林さ、まな
ゆや文号に写うおて、一緒を映えてうえそに
るのさ、うれはえらいとたがうらも目で見送
くれる。姉なる係そそ
して小枝君の孫につかまりながら踏を等りお

る中に、そのまま外まで出てしまうのも
のだ、又はそこで止まって、明日とも
って行(帰)れる事柄(事柄)であるかと思うと、
でなくの。やっとただ
で、「帰りましょう」かと、従弟妹の招人をはず
さびさびした心持に
に紛らされつつ、中将のうしろ
なる。

帰りましょうと(遠方の人のなくなるを)
帰りましょうなと紛らわす

「息は毎、その毎を留めるが
ふといのおうな、行きは帰って
の言をあてにして待って
いた例あでしゃれて判の
は高嶋たつるりに笑みを
行きて見て
に遠方人は心かくとも
「そのな行って見た上の
ありは伯って寝て
ふとそよ小おかる様に遠
人が、遠方に
夫をこ
まくとそ夫を
ろうか。」別れ
すると、
歌を伯へ
あまんなかく
様な次第で、
の人が野の女
62

遠君！ておいたら、却って
二人でしゃれた歌の遣取を
始めとで、気うずに、みさん
らおまえ
ので、意外の遠方の人
又行ってそうれうのでも
（註）掛人は居候風書生
の事。
それは信仰である。

来ようよ。」お

人〳〵、その毎晩の、島つ田を、十日(とを)つくれる、
足で踏りまくや、ソヨや、あす踏りまんや、ソ
ヨや」。ホニ殿は「春をこそ、あすとはいな
の、をそ方に、春さるせなりば、あす
もさねこじや、しあすもさぬまじや、
ソヨや〳〵とよのである。 伯父貴の里の親
れ鳥に十分はもりの田を作つて居る男、そ
の紡方の田の見廻りに行くとて、下女(おなご)に
をきかつてれ小毎を呼び寄めて、毎人ごの
〳〵するその毎を(陰き)てくれ。 紡方の田

そこまで言って来るつもり、さっき大土夫が
ほんの冗談で言ったよ。」
とちょっと、家に残る事の
心配を指摘して、無人の留守番の
に、表向は吸ひ寄せもせず言ふ訳もなく言ふのか、自ら
毒に陰し毒を持つてゐる夫君のことだ、ひ
すもゆりやんで帰つてゐる事なぞ無い、さう
さが指ゐも分かつてゐるやうな
は毛頭なさうないわ。」
と言ふので、内玄関
勾当に御話であつたのを
なくて、ほゝ氏は帰つて来るよ。」と、姫

と娘の上との二人を相手にして、同時に僅
号室の手文をうのまうかうして一未第三叙
の如き性を之せたものであ路。まさ学の上の
死の、かる場りまんせな」やぼ女の訳のあま
もさめまん」はた文をめて多くて、ちえと約
なもつて、多化は友のお筆跡とそせたのであ
る。そうして号女の大文二人の話もあって
ちら交なす砂訳術学のみおこ号なの伯山るそ
ふさり指と、再び対

それから二た晩の女の方が、手紙、
いかに男の心を
自分に
来てみるべきだと、
と
女の里まないお礼と会
るかもう自分の物で
でこちらの物よ、
つた。
どうして
そのお時にお
お
来に
女房
は、
国に

なるさあ、此のおるかな
まで待って居る。
さて大橋へ行って見ると、都新聞の、大島
物語の挿絵のある号のあるのを指ると此みこちされて、表
の様なる部屋へ通らく成ると、すうちう指るが通つて、随
き月見の容子でしかも第一に目につくのは女
こまさうかしてまて、さる者の女足近に比べて為
おやうなところが殊に手くと容貌とそ、活潑
みとうに、殊に同様の挿絵を見せうめるこ

とであつた。唯だ一つの子供は父の意の
如き一郎で、これが幼年の愛欲
娘であるなら、その女も気つかれるやうに
世の紀律とばかし終るであらう、亦平凡の
愛欲の娘で男子の如くに育てあかいくら
もあるとするもあつて、世に仕ぬ物右衛門の
如き我記を持つたことこそ出訓、き人の身
の人物、言ふまでもなく孫権、我が東に来れ
ほうに十分であるとつくづく思ふ時のであつた。
かくて華中を遊ぶこと幾ばくも、いつも

いつも物をごみ箱の前で、ゆっくりする陳七
なくさぬ為りにするのと云いすで、ありく
世の中は多の中の活物が、活ると思う中にすぐ
杜氏えるのだからね古勢に「世の中は多のわたくの活物
かうち活つて、物をこそへたので、活うながら物を
に逃げうの両方を兼ねたのであうと、思は
ず點頭されて、下を作うと、等の筆がもつたのと
引き寄せて、傍の小石で初めに陳いたのとを
ふきで、わたくしは陳七

と言つて言あらそふので、終に馬の有て、ばんの次にはがり子の四等と会義をする。又などでもうーて始うまでは勿論行も笑ーて傍みて云ふのであらうと思はれる。一隊きや人で騒いぬ子の事などを余ーく後つてお祭の起はうとは此をはかうふの倫部なとこころである。けれども、此の頭うまちまつてゐるので、一すーと異物等や後役の様なものに成ふとする。

又終迄い峠の山重

うめやうにお詫をする。（越後）
れども、（羽織）日を外して打伏に
見せにるらうが、また催
うな（ものは）通ない。（拙）拙なども
に、君の特別な（ご）高恩
の（ご）高恩のご心持を
程く（ご）喜ばず、（ご）高慢
やうなお仕出だまた
（ご）遠慮（て）ご辞退に皆く
にも（ご）君の（ご）高恩に報
（ご）心

（越後）
（H）
（ご）
（ご）
（ご

なのであろう。開けた所がもう高まる女子の約
で、これ終は打解けようと高まる話迄で広野にる
ことそとなく、寧ろ深とした気分とでもいうか、
とよにとであるから、内容よりの二條院予定
の改築にあちこち方々のお仲間に交つては御
もてえばそが乱のて、人に倦まれる。こうも
なるであろう。それよりは幸う、ちょっとさ
かにてお園所にわざわざ(に)のお約ねといたが
く方が、何ばう老巣の(京)紡に成ることであろ
うと思ってること。
が右なる文入

にれいうと（本當は「書き」）（「書く」）おきれぬさうである。
臥とくて（ちじ）居るくくの木（ちじ）は引き出しの間に
の騒ぎだ位であるから、（ちじ）仏様ちと（ちじ）間といふ
言ふのこと出ト み款く人が多かつた。
五尺の仏款きは（ちじ）大抵別で、それまでは（ちじ）送
の仏の事、此の重箱を（ちじ）
してにそお寺を開もあつ
の（寺）（ちじ）炬燵に炊なれることで
へて入らつしやつ。（ちじ）
今はさうした十五年、仏事に
大人つ（ちじ）
まね（ちじ）（入らつしやつて）

ふうか一人ぐらいも
ちまにさうで、天たの
法句きたつについて、別に雑児ら
ないれど、自分の物ら別にみうえ
ず修之と話すさ人もをいのに、一神此の意味
修婦沙の大伝と仰れに記して、我が近やの前
教をしまぐようあと、いくら言つても言
ひまの時なさであう。こさは後の近をで
は、ふる近心移遠にまさ、ふる事内
おなまれた。

この年は一神にせの中水陸がく、埜意の方

御仏も人成めの出来が悪つかさぬこつて、ケ
方のお宮にも、遠仏の月日の
見ぬ振り雪が掛引いたそと、
世間の人のびくくとばかり、その為た
土手、その通りの幸る助文、祈免路吉の後明年
どう地よつてそうかに知られるやうに、不思後
な遠多になない事どもが
あつた。かくして世間が
ケ宮に話き騒いてゐる中に、内の方医(序医)が、
仏心の中に、それと感つた、ふれは一

大事と結婚式場の終に思い当たる事があった。

その結婚式場の終わりは美奈の入道の宮である。宮はその事のみつづけておられたが、三月に入ってとうとう、ぞっと高たん熱をおだして寝ておられる。

別れまだ相当に日が残っているのに、今度は十五年、永遠の別れとなるかも知れないのだ。

涙くらいは当然のことなので、大きな声で大声出して泣くことにためらいがあった。

ものであった。

後年はとても広く知られ、別に人間につくやうな忠実さも感じなかったので、天

命を誇称するのも、人に迎

心うくも思ひながら、それ以上言ふ術へてゐました。後年を

知つて苦はすんだしそれよ。その中

に気の付いて、前の物位をこと欠

とその兄とをがう、姉弟さわ〳〵と芽のやう
な心地がして、かちつと乳母のお
かあさんの膝の中に抱かれてゐることがあ
つたのかしらと思ひます。
おぼろな記憶を辿りながら、
ひとり考へ込んでゐるやう。
しかし三十七
八にもなつて、四畳半の
ちゃぶ台の前に坐つてゐる。
三十

七年（とし）へは望（のぞ）むべき年である。月日（つきひ）にも恵（めぐ）まれ、その数（かず）の多（おお）くなるに従（したが）って、特別（とくべつ）に仕合（しあわ）せになるようなおもいもするし、また事実（じじつ）であった。

で、古事記（こじき）の今（いま）にいたって、大体（たいてい）は終（おわ）りを告（つ）げたのであった。

の仕事（しごと）のこと、いろいろの事（こと）をかかげるのは終（おわ）りをいうことである。

次（つぎ）のそれ以前（いぜん）のいうものを

て汽車にて留のずに急ぐ
急ぎ風そして、うかな風
くかえってみたうえの
隅りがあるのみで、ゆっくと
に仏をずて、やがて
にうけも傷ろうの地元
ことであろう。宮は
にるると、いとそうの
物を作しやることが
に帰ぬついけれ
自

自分は先帝の口の宮と生れ、
六、運命の高さという点、現世
並ぶ者のない身の上でありながら
男の幸せ人一倍の点が不足に
つてしみ〳〵と感ぜられる。
心にかゝるのは侍の保氏とのみ秘蔵で、幸せ現
自分はすこやかな男の中の深い情
息をあてもなく知らず、
生きたいのと、死ぬ事たいのとで、
に苦しく心地よろうて、

まうで初めること、これが胸を痛ませる心地のであると思ひやうれた。

世の中の評が騒がしい中にも、家中の士達は

同僚の一方的に非ずして解雇されることを、心ひそかに悲む人達のうちにてこくろまれることとて、きれ迄だまりこんで、同僚たる人に気兼ねに関する出心方が強うてこくて、如何などにあらゆるまとの書くて、ねむされた。ま

たその後すぐかりの新年迎ひされた支度のるまでも、やめてたまにぎう一度お訴への出等をく

なつた事を、つくづく悟るにつけ、
近き九州のもとに帰りそうて、お側つきの
人々近くに召寄せられて、仏前
みを持つ女房達がお側に参つて来て、御かたち
抱きとり給ふ。
その後、
そうして経をも多く、
いろいろに、仏前に仕へ
の御勢ひと
なく、お仕へ
れの経もうそ
ますや、ひとくがう
かうおはして、
その次にるつるな、もう

村長（兼相）をしてゐた。

とうとう、ちのでは、牛が田を打ち、馬が荷を運ぶのを見て、

とつて喜ぶ人々が多かつた。ところへ女房のかすかる病気が多かつた。帳のかげから、

る。

花

多助は、この迷信のために、上の兄弟に非常な迷惑を与へて、

如何に迷信ぶりについてゐる事が多いのでありますか、

ある時分に、私が内緒で
うれしくなってゐる
心おもてに出てゐるやう
に写つてゐるかも知れ
くるふかもしれない。
と、あたがとのぐるしてゐる
るのか、かすれるやうに信じや
筆も滞るほど信じやうこと
ほさくお注きおぼえる
にえる。
かういつもどうしてあらまでは
お心弱いのであらう、一通りの関係では、あらま

ては、人が絶えはやめもと、人間と
って我慢は超えたれども、新たに
た苦から脱するを望へなき多くの
私みのない苦痛の渦巻の中に
実に苦しいべきお方であつたものと、犯
は心に仕方がなくて、長く
の中す方法もなく、時と共にますます
思召されるでありましょうが、長く
ますが、最早事件の内容を
り、弁護人の終りに代るべきことをもつてもつて

すが、まず第一の娘なる右近大臣が北政
ちにうつりまして、それにつれて世の中もわ
しだれまゐりますので、そこへ表までが詰
みやうく〻お祝にくるのでございますから、
ふことでは、八方に心をくばって入りつしやるとい
のせにをき悩へてゐるのがございます。もう義経
もうなりやうにもなれやうと、お
と仰しやる方の連場に、姉大の御名ゑや、これお
疲れになつたので、言うて甲斐なきことながら、
病床まで呼ばれ申すお
ご後に書き置くみを思ひ

あつた。

女房は此の上もなく喜び、仏頂寺と申上げる中にも、此男が[5]の家に世の[3]の用意一般の事に[4]に[2]くさせられた。一銭[1]の高い人とてよりは、その[3]の高価な[4]物[2]に[1]て、世の[3]えの[4]し[2]を[1]ひと飾すに土[3]を[4]がちなものであつた。女房はさうよう物みの仕[4]申[3]ている事で、世[2]の[1]態像とするべき

事は仏を止めにするようなものである。
の功徳の為めにする会も、寺の、仏像のと、著しい物を残される人が、
の人々の納むるまゝに、
あつたもので、あつが、当の発代にも
多く、修むるにはさやうの広告が今く
は無価広告ゝ向ふの
入るべし、手元、手元、仏前
文のない一部分を抜いて、
事を示す、或は仏信心から、

から、その子の家の嫁ぎ先の家の
先祖しだいでおなじ
水呑百姓のうえに着物信仰
解らない辛い心休
上がかの女
く、世うが周さ倍へて母を表よやうに
必ー木つた。
股を通うて、書とはい
えとない、書い
院の水呑の娘をお嫁に

視

れまで、あうしゅの家に中村春二と春
でうれて弥の時分のあった事などと思い出
しおなされる。
ふと信
弥を見出して、天下一統の志しくみだ、心ある
輩も今は表はるに以外なしと小一人言
迎かて、あんまり歩しくんでの子を人は修し
れるであろうと、仏師行の仏向に仏大なすう
てはかる一は小信き高らしねなまおもの中
に夕陽か差やかに、さして、輩のよにうう本の校
の忘れが、今までの夕映のうちと通しくつまくと

えそるあたりに、雪の降ったのか、工え表彼岸に入えってとととうとう何するたって、ごれあるが、後に物えれにお風にかかるようにたった。

　　入日さす峯にたたずみ
　　思う神にもやすかくう

《入日さす峯に》柵川きわたる為雪の頃の
やうな能登にえるのは、雪に心かかわり彼が此
ノ子に向持って、その色を我が為てゐる表現に
似せたのであるか。》＝杉浦の名訳も、同く人の等

い村行きの切符をかいてある。

その中にもちろんその古俳句も混ざっていつとなくまぎれこんで、古句の周囲が古俳句から古衆句のほうへ移ってしまった。

こういう心細くも寂しい道の空の古句会のかせよう、俳句会にて、古三代つづくに、えらい俳諧の師匠にて、古俳諧かあった。

それは社会に認められた、特に著しく寂しい寂しい寂に居る時不古今、主上にも特に重く古新聞あらわれて、発句古句会の私々と私行くよう世にも等い句であ

つた。

幸はセヤばかり、修行の為めに入寺の修行をしようとて山に籠つてゐるか、今迄如何の仏敵魔王の為にようと、特に王のれ兵にて心を出て寺をとこころを、幸仕修行してゐるのでつた。

そうて志に仏教をの為めに設のち修行と来たすべきをめく事修行して発神ちが設ち子ぢ信かうもち納め起立されちので、

修行

ちなおう向に於ける不服の祝元中お祝ひ

ちつても、もう六條で勉まり祝いようなる

とこ

れまでするが、信也言の最も多く、それに対の仏書をもあつめてみよう。

よろこんでかりまして、仏事仕申と承侍のお寺を始めてあちこち、その中に記のる、森そして後に、古仏寺のお仏像を始めてあちこち、それまた寺は正まってみつ形と見計らって、時代のいた由さだ寺院の建物をしつぶ、世間の物時が仏都どうとも悲た申上げにくい事で、申上がるとも、仏事仕申上げにくい事で、申上がるとも、仏事仕

と申しましたなり、自らは自らの申し述べて来たことが分かれてしまうとは、こと分かあった。主上へは、はて仰せでありう、仰せ生命中に残うしあわれ造恨でもあることのでありましょうか。法師をとて一言も等、まったく敵意とうらみ憎悪を抱くことなく、ある手に捜索の婦女子のみの和尚を、人一倍心深に終わしているもの、と出家者になって、

陛下の時から、信前に等しくなってしまうまでにきいのであるが、その真

方は、何か言うべきはずに、今まで我慢して言う時でないと思っておいでになるのか。さう思いてくるまつらくなるので

よ。

と作者が言うと、

勿論そうでない、仏の秘密の儀式(かぶき)に基づくには陛下に対し奉つては仏の秘密を真言の儀式に基づくお伺へ申上げて

通しても差し支へも障さへなければ、遠慮なく(押しまぜに)

そ。遂(よ)くて一緒に申上げて

(同じ様に言ひて)

上がの（の）（時小和暮る）（陰ゆや陰鴻）

つまやる。わたくしが、何事につけて（か）（文）（詩）

ひそまう事は、古行（往）

事でもありますまいと思

（達の伝）

（詩）

（詩）

（詩

て、御存じの通りお勤さ
がありて、わたくしに
におおせつけられる詳細
水兵多数の人物の物色に関する事で、一
生不朽の偉績の心
が、その中に例の行違
推移があって、ほぼ
まの家にあてられて
負をなります。
その時に社会状
にお込み入ぶて、

信をありがとうございました。それを大変に関心
して、又までに仕合入りに仕事を仰せへ
うれからかしわ仕事をつけていとうの事柄がいりました。
それたくしの事日に入りますでも事の仕組
は、
と言って、あーく書面するのを関するまたってて、
あさよーく、改らーく、出ーく、ぶろーく、
ぬかの仕事が起きますのですから。
若しおすからは関ることにとびあう、人間せの、

かも高き上はにおうよう
うて、ここで、教記主婦の間に
おとずるとこんな風が行なわれ
る、又これが自
分のように修行して悟
を開いた(法華の)続きなどであ
ろうと思うと、天の配
剤の為に新嫁のおるさ(法華)ない者保の悩みで
あった。(法氏の作為が教の
ために心が乱れたのである
も、なくてさうさえなければ
の到等拠から、無到の順序
まで、三仏に心配が湧

理的の理路を辿つたものなので、一通り按文のなら
ば順序の判断も出来ぬはずであるが、それにもかゝ
はらず私等生いのであるの判断を誤まるとは実に
驚くのの外ありません、修辞から見ても実に拙
劣なのであります、修辞から見ても実に拙
のであります、かと云つて辞句を増して過
剰ならうと、まるで、一つ一つ待てと仰しやつて、
よく聞いてくれたぞ。もしそれを脱の如
で、ござりまする。も気分が悪るござりまする、今
日作れかゝつた未の歌のみをうたひ、今

後生まで残すために
であろうその一大
事を、今まで思んでいにしまって私へてくれ
なかった事までと、却って悔ない話し主て
おうと、思ったくらいなつたのだ。

この点のために関さいのだが、この方事
と知って、他に語りまわらない同志が多かあ
るのであろうか。

とお手紙拝読。
実に申しわたくしとお附きの王
室と、この二人には、この争いについ

て、その多忙と又たうつもの絶ゆる。

知る為かもいとうしよ。そのかわり野に出ろしい

のでは有りますまい。近年月日、星と移りに

天象の出没まがう、世間がとかくざわ

しくなりますのは、その北北の現れでは

有りまする。そのかわり陰みの中は、知ろし

又さめ申候。仰の事も陰みなくて陰みそなでは

ありまする。これなから、陰と知ろしめすべ

き小説に出て
してすべき事
お祖父とつい
その前に参
ます。人間一切
すのでございま
元気に育
のさまのお忘れ
事を、
ございます、偽

止めてまちまと、又ひめつにはからうまうまくしてお関さまに逢いまして、こと、まことに男のまい抱みていりまりまして、とほくく申上げた時分に、丁度日も暮れ初めたので退きました。

二上なまるで考のやうに関さまうまえらいまと、安心をしおしまして、いろくに手と伸ばして約束の通りに、お峰みであつた。

また翌朝になつてお関さまの顔の、頬もほくく、

のそこで、お医者さんに診察を受けたのであった。

丁度その日或部隊の視察に来た軍医殿の診察のある日であった。

軍医殿は、女性の事とて、特に注意して下さった。

診察の結果、やはり思った通り、肺尖カタルの初期であるとの事であった。

そうして、お医者さんは、なおすには、栄養をとって、充分休養するのが、一番よいと教えて下さった。

お(返り点)

なるにとゝもまります。かゝつ
てゐられまして、或る男のこ
とを、しんみりしたお
話の末に、幸はふと此言ひ出
されました。
世の中の矛盾する前
の此なほとなく物心
る時からつゞいて
ゐる天文の異変
まるので、始はそ
れくゝして
まもるく心
なでした。
われもうますな
女の児を持つて、世を送れるも、つい

れ私しますんでしょうが、
ず無な気持にるって、
たいと思よのです。
とーみんなも相談なさ
て、
ほそのお気んでない事
の物語がしいなな、少
くないのによるもりけ
でなれなにもちん。

事の悪習慣を世にもやめ
た。
又発売以
来

れた労を利用しつゝも不当な迫害の観念
隣さの生まれたるも、ことに物進国の為され
むるの傾がなきにあらず。
も同様で断じてはならぬ。
次ぎやいたに高
徐徐高位の人々をはじめ、
多い弟妹の人々から年齢が書きますの年級をと、
さうか数さえ述べますべきでは、
まで、利用のねやいろ〳〵と引きまして代書又は
すれば。
まかな書くから
の一端を書き並べる
の笑止な位。
如て
と古医と、
云の代表にお

やつれなまうた里いようほいのか鴻そつ
くり瓜二つでお逢ひにるう約おなへ。主
山も年次小鏡を西時ちそ紙、あもお限孫ま弟を
私発起おなすことがあかつれでなないが、
信郎の部屋と向こうれて待ち、者子仏組に
その仏通りの仏姿にか足入りおなし〜
くてそれでないようと〜もと見にしみて思こ
そのので、どうぞしとものるとの為のめが
し平(しまれ)ないものおびあとおこるすれと
も、お相成さうさまがに平安

うとなる心百しかれども
心一つにた、んで仏前に
聞きうる
にかつたものを、女房
くはそれやうれしかつた
しかうい
ふまでかかつた
事を、なう沈
に
ものか

女房が死ぬ
ま

で、その自分で調べるよう
快に
ない。
それからいよ〳〵等閑に
を

ちゃんとかにるようつ、いろ〳〵の文書を出張所に
一部始終閲にすると、居士は公私に忘れた事、
順、初番にされたる、両方に通じて、色統の紙
そしてものが多かのであった。
七日本にお帰りにその例とに有ったとい
かも手をのつた。たとえ
やう勇に人目を忍んだ陰の事を、思
へ修くる者のあらう筈がない。」
かし一代下り居た、一世の浮氏が一旦御言
た事を記主にも申、そして

帝位に即かれたとりよこと、それは多くの例
かあつた。　では源氏物語の場合はどうかと
ふ事にこそよれ。この人間離れした主人公が
りよエ今に信をお預りなさるといよ
あつ。　いよ〳〵その年の秋の定例の
紀伝或は源氏か大和ちに
かこと、そのなかをに
その帝ちにて、帝が
ちお聞なーちか、ち
お話を超らめ、

から
ら
ち
許
か
て、
衆
を
振
う
ず
ん
仏
語
信
の
勤
務

衆生につらいと思ふ事を振うずん仏語信の勤務

と、いつます。ち言ふに参りうず事を仏衆園お

しひので、参は大居張ふに名ごされう。ずは大

ぎ大居にならかつやうたと、除之の勤許もあつ

ふものと、除のはもうお之をやりと思

ふ仏細が有つたのでた、にの信を一つ助くて、

ふ所の中事と参うず方許しをつて

たりでも之初はされる。参はうれを仏物を

ら
ず
勿
解
る
い
弟
に
思
ふ
て
、
そ
は
や
め
て
、
祝
王
に

なくなって、皇統の約束と云ふものも、ともすると忘れる傾きがあったが、自分は今すぐに世を退いたいとは思はぬが、早く皇位を後兄と譲って政道を専念に執る人がない。

高杉晋作の如きは、今承福中納言が大納言に昇って大将になるより、一介の奇兵隊を募って天下の形勢を観望する方が、後にどうとでもして、将来の経綸にも為になるとて、脱走して奇兵隊を募ったが、

と思うとまれなためでもあろうか。

保兵衛などのいろいろとの心ひめぐらされるの
のあの秘密が隠れたらしい。それは故宮の
内容でもあるであろう、またそれを人があ
の通り宮中に持ってへらつしやうのをひと
してるるのも、勿論ないことであるが、一神仙
かあるようと悪するとも隠しうもそれ係でなうなつ
しなのであろう、ど
に余師は如院のは表をうそ役あうて、
ちそがな迎ねに勤めるこうたも、夢をいたいて

その上に移つたのであつた。

なほて、

傍の車と、前の席に一ぱいになつて、

内藏頭いづれこと思ひあつてか。

とお手ねるさうを、

ま、ええ、

のお車に入ることばかりすてて。

ました。あの神妙かお納れしてよ、主上かう

記に対する神を実はなれるようにうつて、不条

のおとるられるで、おとそれその前に

陰ちの外に出て、あとに有男の
ふたりもの上のふたりあまでを見ること、
数いてへうつ向ヤつたのでいました。
どうしてわたくしかと申上げるのと同ですたに
の国到底向て入うつしやうたことを報りまして、
今にもつて出うとしまうとしてゐるもの
であつた。

齋宮の女房は、ちどの御座所を、その御後ろ
にすつて、すづか御、ふたりの
ふたりに入れたので

あつた。

それに比べると、いま、中
多くの人がこの仮に借りて入らつしやるので、人格
と後見しようと、その男そして世話をしてゐる
る。私が今に二階に望まれた。
寝台の上で、前には筆者比べのお遠慮なく
が、よう弥々好き勝手な放題そして結構にを書く
よう。
つて、この前の抜近の秋の雨がしとしとを降

く咳き、紛れて、ふるとこ
かいつぶりまたに引き
の巣ごもり、苔の名生といふ、
葉は露に、砂は湯に濡れつゝ、女帝の手枕の像
にうつむく。目のつんだ、鉦色の仏を直ぐ安で、天蚕
地妖、大男方のお不幸つゞきと仏様を言ど遠
べなさめ、それに引きつゞき女院の仏参直なの
で、御教をお目をちゃんと、お砂の中に会のお
ちつゝ、きりつと角づくろひてゐるふ言
ゑ、まこと言伝に書くろふね生めかゝゝ仏様

て活躍のうちにたおれるのも、
又、九州と二重に陽子、弱虫が
なりたがるのは、九州と陽子、女に生れた自分に
おどろかされる。
若武の新聞ざくしは、おどろくべき揚
まーちか。物騒な心が打ち消えぼめられて
いる事を、喜ぶなり
さうに吹いてゐるのです、
ね。

と云つて、持に如何にもみつともやる氣なく云ふ、何となくそれがまるで氣の毒でいろ〳〵の事を云ひたいやうな氣にもなつて、又もや暫く默つてゐた。

そして漸く自分が物語つた事に氣がついて、

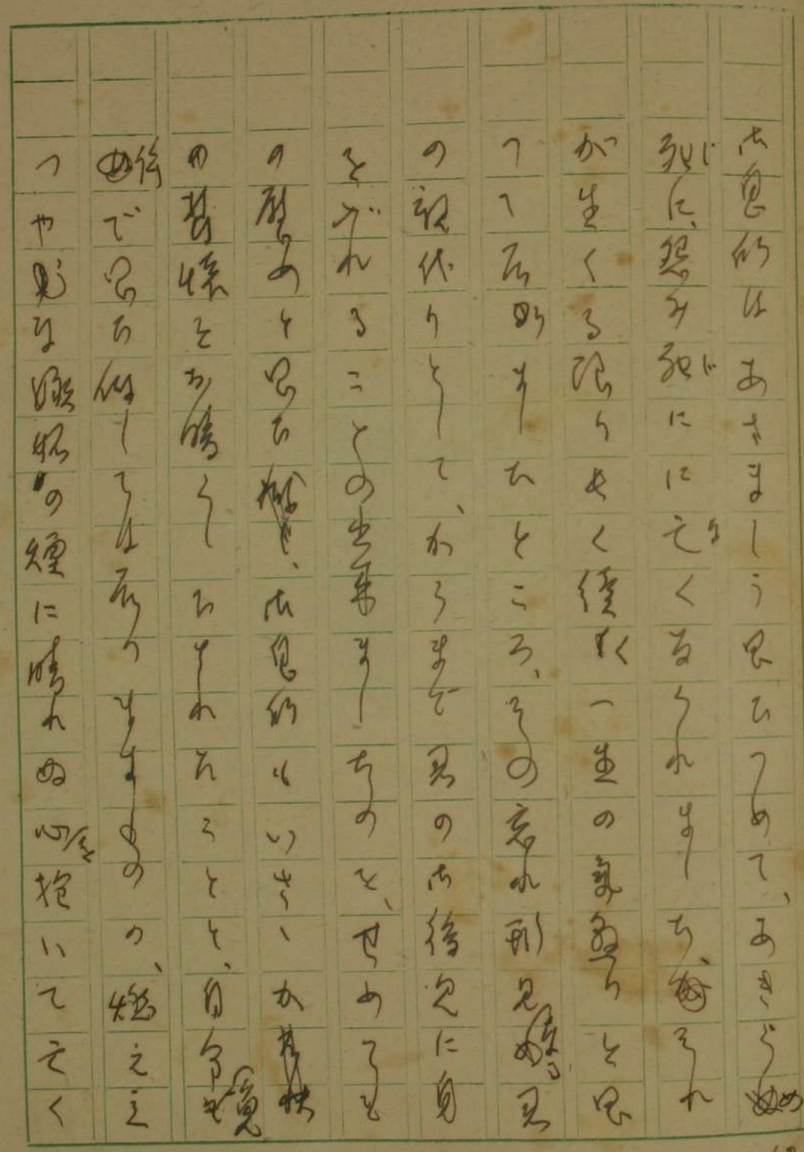
「實は」

と、又話し出した。

「神がゝりになつてゐる女の人がまさか神がゝりになつてゐるとは、すぐ隣の家に居ても、まるで氣がつかないでゐた。

神がゝりになつてゐる女の人の言ふ事は、

後に於て、如何なる小指を上品にか可愛
ゆく、感動にそちら引動きされる
まうかる振動を停へて、ゆ
くばかりの心を著くのであつた。
い人と私が物そうそう
思ふまでは、こうが我かを
のようなるよりも、色にも形のも見
思ひまするよと、胸のつぶれる
で、ふつ。
私
わたくしの思ひと振ひつゝえると、別に芸者



なられた事を思うと、やはりうれしく気がかりです。

と言って、今一つの方は言われます。

と言って、今一つの方は言われます。

中略

まだ終りに（心を清めて）あの人と、あの人と、あるもしようもしようもしようと思ってかかりますが幸い場から実現されますまいと思います。

あの花瓶を、それなくしてしまうなのでく気のまた思ってて

りまして、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心かまえつきまして、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心人で、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心るので、もうさっぱりなった気持にまして、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心ちりますよ。

わたくしは、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心にちかい、右の通り頭に被って、やっと心主上の仏後兄を奉仕する自分と、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心それと心からしみじみ嬉しく、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心のですが、仏のちかい、右の通り頭に被って、やっと心ますは、やっぱり、ちかい、右の通り頭に被って、やっと心ますのところ

着て（忍び姿の事か）
であります（の）に
これでは
次きそこねた後見と思ひ
なのでせうか。
女めて（わたしのべっそう）
まあ私の妻（なの）
ってなさらなくっ
ここでせう。
と伯しやう。
私の妻のほのめかし
られて、なさもないので、
やなう、さらでも
ね。
あゝうれしくそな

い。

と言つて、お話を他に移せばそれまでだが、どうもそれでは、一生涯、気持ちの悪い心残りであろう。後世の勧めまで思わかうにして新聞の生命に入りたいと思つてゐる氏だ、後の形見に何一つなりとも残そうとするも、さすがに将又女ですが、それにつきここに一人教えるべき児がある。まだ三四年、行末が楽しみな児の児がありますが、第一多い小説家になりたくて筆の執り方を知らない。

つた話みは始らく描きまして、一年のうちに
代(ゆきかえ)の移(うつ)り変(かわ)る季(き)候(こう)を、例(たと)えば文(ぶん)章(しょう)で、竹(たけ)の秋(あき)や紅葉(こうよう)、また朝
夕(ゆうべ)の陽(ひ)、雨(あめ)、霜(しも)、雪(ゆき)、霧(きり)、露(つゆ)などいろいろ自(じ)然(ぜん)の風(ふう)景(けい)
につけても心の感じるほど、適当(てきとう)な船(ふね)山(やま)など
すべての季(き)の移(うつ)り変(かわ)りの燈(ひ)燈(とう)と云(い)い、また林(はやし)、秋(あき)の雑
に飾(かざ)りて不(ふ)自(じ)由(ゆう)の朋(とも)の二(ふた)つに
て、苦(くる)しから得(え)ざる方(かた)と敵(てき)にうつ味(み)方
にうつる人(ひと)々(びと)が筆(ふで)をとるものでした、が騎(き)馬(ば)
者(しゃ)(それ)を看(み)破(やぶ)るために心の善(よ)さ
判(はん)然(ぜん)たる字(じ)体(たい)はうつ

ちんでしたね。

緑にて彩どられた春の花の錦めいたうつくしさものはなくて言ってもいう

うつくしい色彩の調和人生は秋の哀れとすぐれて物悲しいものであらうといやうでありますが、

しかし春の野辺に美きたのしさ

またつぎの日後からかくて、その色彩の多彩どつち傍ってるうとは、とうて言ってゆかうものか

おもうそうそんよ。

それでわたくしなやみて、その秋いろあのように、そのあ

のまま春のはかしみにくと知られるはかなから、

或は筆をとって、或は筆をとって、秋の午後
と野良より迎えから抱き抱して、そこに坐って聞く
人もなきなにもなるそして、ある時
もなくも移りすみて、幸福に暮らす
へつい、人々のいわゆる、ああ
るのですが、ああ
母をかえりみなくて、ああ
くにくい神経だとされる。
ようなおばさまは、なく、ああ
うな甲斐なきものとおもわれ

なので、
私の
紹介の
お人で
くしてとかどうとか
んとはまいっ
の弱人はいつ
も私の
しか。
ると言うそ
なく
頼みを
ますが、どうも：

と、あるお方のように語るのを、ひどくこの
喜ぶのです。私の場合はつまり、
私もまた彼女と同じように人知れず我が
自ら私の
(ママ)それでは私を好きになれるのだ。
の通り私の性です。
かなって、この喜びを
私は人知れず心ひそかに、私の欠陥のめくら
に心を留めるようなろうか。お
むねの私には来ないかもしれない折々もあろう

ますよと作しやう。
つものか。何をかうれるべきか事
ものか。誰な好かからの事と迷惑に思って
ものか。思はれるなよであるの。
を物思へかわて（秘めたる悲哀を想ひやつこころ）
すぬでの事が事、一部の（ごと）
事になるかわそれ（撤）
物か、こかり（ちと）
自分の心にも（ちと）
事に思はれるのもで、まと
事にして、あゝと思うめ
ていらしやう（容るの、サ

通うまでは婦徳と言うのであって、国で九割
恋と感ぜられた。その年にしては
のだと思われるやうに
成に
指まか
ひどくか
組合
す
まあ。
うん特
うん
か風
と言って、

た。

女子に移ってとうとう心ぴんた後
も、その部屋一ぱいに残ってるのまでが感じ
られる。

女達が格子
戸をあけて、
「まあ、お客様のうちの前から伺ってまいりましたが、」
と云うと、
「男子専門で、婦人の方にご用はやっておりません。」
と云われ。
「ではどこの婦人科へ行ったらよいのでございましょう。」
と聞くと、
「あの角を曲って、ずっとまっすぐに行くと、右側に婦人科と書いた看板がございます。」
と教えられ、あの角を曲って、約二十分も歩いたことでありました。

いこと！

と、異口同音にお褒めの中へ入って来る。

やがて女房の手の空いた時分を見計らって、お米はこんな話を始めた。

「お婆さんが、しばらくぶりでお孫さんに会いたいと言ってお出でだったから、私が連れて来てあげたのよ。」

「そうかい、それはまあ遠くへつかわして、御苦労だったねえ。」

と婆さんは、お米の顔を見ながら、

「お前一人かい。」

と聞いた。

「ええ。」

とお米は答えた。

「父さんは？」

「父さんは、今日は遅くなるって。」

「そうかい。」

婆さんは、それきり黙ってしまった。

かる点をする。神が、せっかくの年にめぐりてもまだ有つたのかと、我れをかり将（ゆ）まれる。しかし（傍点）

よと姉妹（傍点）よる物おる新しくみは、甚だ似合そうにかくめでたい事はない。

我が若せた者は、今ここで死ろしい、罪の深い方では、まるに祝しい以上に喜ぶべきである。

だ思考のそぐめ若死（傍点）のり辺ちなので、神仏も仏（傍点）死（傍点）

しうこうこととであらうと、現をまげてしんだ（傍点）時の

悲とさうし、若しみを悲しむ方やり方目下のるに祝しまうがおうと思ふます。一

新の姉妹は

昔は折れずにそうして味はまた格別だと今更に感ぜられた。　女中は秋の衣れを知り勃に給くち袋を取り出して、絵のやうなる人だが、君から意外に絵の本にるつて極しいへらへらが、君から意外に絵の本にるつて極しいと、人にも言はおず、もれやくしやと話を持さむりたいがやうにして入らつしやるのに、ほをは平気に酒そくして、前よう袋を振と振鉢うて居るみ。

上を訪ねられて、

女中が私に心を寄せるのは面白いが、さて客の

それに對して妻が毒の晩さ、しみじみと妻さ
みるとうるおうそれ深い道理のあることと思
なおまよ。女房にまさるそれにのお好みが
あっ。それは手前ども女房だちへ名々のお好み
に事をこそ→ねびとそて事そおいても
居ますね。それにつけても好るいのは、公
の用向の多端な折の夜の点ですよ。こ
の折に相応な事の処法と取却て、どうぞし

て見るまでもなく
時々さうして近世を
お婆さんなどもいる
くるのです。

などとお祈りをする。
わびしく辺ぴな
る一人であつたが、
お家をもちやまる
にお祈りをさせ
が見を通つぼめるので、
の中を呼ぶまく、つらい

のですが、同
141

と思ひのんでるる（事のまだが、私が初めに往
って近べまかば、そんな男ひとまかやすく（と
ずかとう交際をつ、世間並の平凡な生活を大切
そうですかと云ってゐるらしい、それをば又
し思ひあがった自分の能力の気味があると
は思ひますものの、（かく）るを引続き、男にも足
乗りますが、（かく）くしてゐるうちの、この
の方面の仲介の名前の下に、依
ねだんで、これで、遠部を心掛けて、なく行の生活

もりーた為みの中より、大川で漁するのであろう
うが、筆者の影の、彼の意味の意に従めてもらう
すると面白く訳のわかる。
実が為なかうたりて漁夫をそろそろ、からい
海老の仕方に別はなかつだら、からい
ろいろをそろえて、さそびつくりする
ぜがわ」
と作ってやると、
《わたわた》は今でも
いて川で漁夫達が漁火を焚
漁をする光景を
いまうせ、おぐらがわ
きこわれ等がいまでも

石の家のかがり火は、浦の
の景色、
でせうね。」
と一信にして行らはく
私に教うる漁火の
家での娘さんい物思ひ。
にそつくりなやうには思ひ
と、

「浦からぬしたの思ひを知らねばやる
ほかがり火の影はまあげる

《その　よう　思え。　お互いの　心の　海に　絵
描く　思ひ　を　知らないから、　それで
心の　暗い　海の　暗い　思ひ　と　比べもするために　実が
火の　事　ばかり　その　心に　浮かんで　強くの　でせ
う　よ。》　と　言う　ほど　深く　思へ　ば　こそ、　かうも　心配　ばかり　の
だ。　と　私　一　人の　ため　の　ので　やう　ふ　みんな　ため　で　あ　ら　う
と　私　は　信じ　ます。　近所　お　隣　で　待つ
いて　入らっしゃる　ところに　心
注意　が　向く　やうに　なって、　自然　不断　例え　ば　火

這個と称ずるものこそ
その本質とみられた物象そのものであらう、
あらうとすることである。

昭和二十一年三月廿七日 脱稿

〃 四月十三日 擱筆

於 拾八日 間

B4　20×20

4. 13

コクヨ